

多量のインプットで英語力を育む

松沢伸二

(新潟大学)

1. はじめに

英語の学習指導におけるインプットは、生徒が聞いたり読んだりする英語である。生徒は、このインプットなしには英語力を育むことができない。一方、アウトプットは、生徒が話したり書いたりする英語を指す。生徒が英語力を確実に定着させるには、アウトプットの機会も必要である。

よく知られているように、インプットについては、インプット仮説 (Input Hypothesis) がある。これは Krashen が主張したもので、学習者は、自分の英語力を少し超えたレベルの理解可能なインプットに接することで、英語力を伸ばすとする仮説である。アウトプットには、アウトプット仮説 (Output Hypothesis) がある。こちらは、学習者が英語力を伸ばすには、理解可能なインプットに接することに加えて、英語を話したり書いたりする出力の機会が不可欠であるとする仮説で、Swain が提案した。

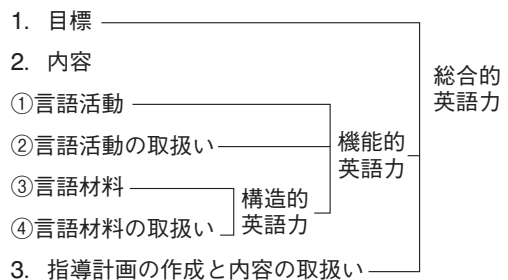
生徒の英語力を育むには、発達段階に応じてインプット仮説とアウトプット仮説の両者のバランスに配慮した指導が有効である。本稿では、学習初期の中学生に重要なインプットと英語力の関係を考察する。新学習指導要領はインプットを増やす方向に踏み出したが、その背景には何があったのか。新学習指導要領に基づいて編纂される新しい教科書では、生徒が聞く・読む分量が増えるが、移行措置期間の現在はどのような対応がとれるだろうか。

2. 中学で育む英語力

生徒にインプットを与えて英語力を育むとき、その英語力には構造的 (structural)、機能的 (functional)、総合的 (overall) なものがある。構

造的英語力は、語彙や文法といった英語の下位システムの知識を習得し、文レベルで正確に使う下位技能である。機能的英語力は、英語の下位システムの知識や下位技能やその他の知識を駆使して、実生活で要求される課題を英語を用いて遂行する能力である。総合的英語力は、構造的英語力と機能的英語力に加えて、学習指導要領の目標に示されている「言語や文化に対する理解」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」を含む総体である。

この3種類の英語力と学習指導要領の記述の関係は、以下のように図示される。



中学校学習指導要領は、英語の言語材料を、音声、文字及び符号、語、連語及び慣用表現、文法事項の範疇で規程している。構造的英語力は、これらの英語の言語材料を習得して使う学力である。学習指導要領は、また、中学生ができるようになるべき言語活動を、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4技能に分けて挙げている。言語活動の一例は、「まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること」であるが、学習指導要領は、こうした言語活動を1技能に5つずつ、合計20示している。機能的英語力は、先の言語材料をこの言語活動に用いることができる学力であると言える。最後に、学習指導要領は、世界や我が国の生活や文化に

についての理解、様々な言語や文化に対する関心、国際社会に生きる日本人としての自覚などを養うことも英語教育に求めている。構造的英語力と機能的英語力に、こうした理解・関心・自覚・態度を加えたものが総合的英語力である。

3. インプットが育む英語力

英語の学習指導でのインプットは、生徒が聞いたり読んだりする英語であるから、授業の内外で生徒が英語を聞いたり読んだりする活動は、インプット活動と呼ばれる。

Rost は *Teaching and Researching: Listening* (Pearson ESL, 2001) という著書で、聞くことのインプット活動には2つの役割があると述べている。1つは「第2言語での聞き方を学ぶこと」(learning to listen in the L2)であり、もう1つは「聞くことを通して第2言語を学ぶこと」(learning the L2 through listening)であると言う。前者の役割は、英語で聞くことの言語活動ができるようになることであるから、聞くことの機能的英語力の育成である。後者の役割は、英語を聞いて英語の音声、語、連語、慣用表現及び文法事項を習得することであるから、構造的英語力の育成である。

このRostの聞くことの考え方は、読むことにも当てはまる。すなわち、読むことのインプット活動の1つの役割は、「第2言語での読み方を学ぶこと」(learning to read in the L2)であり、もう1つの役割は、「読むことを通して第2言語を学ぶこと」(learning the L2 through reading)である。前者の役割は、英語で読むことの言語活動ができるようになることであり、読むことの機能的英語力の育成である。後者の役割は、英語を読んで、文字、符号、語、連語、慣用表現及び文法事項を習得することであり、構造的英語力の育成である。

池野修氏は、本誌の前号で、英語教科書の「本文」には、“text for mind and heart enrichment”として、意味のあるメッセージ内容を読み、それについて考えることを通して、中学生の知的・精神的成長を育む役割があると指摘している (*Teaching English Now* Vol.18, 2010)。確かに、3年生の

教科書でA Vulture and a Childの文章を読んで、内戦や飢饉で苦しむスーダンの状況や報道の倫理について考えたり、I Have a Dreamのレッスンでキング牧師のスピーチを肉声で聞いて、人種問題について考えたりする行為は、多くの中学生の心を揺さぶる。これらは異文化に対する関心や理解、国際社会に生きる日本人の自覚などを養うことに資するから、聞く・読むことのインプット活動には、総合的英語力を育む役割もあると言える。(なお、インプット活動が、話すこと・書くことの機能的学力の伸長に間接的に寄与することは、もちろんである。)

ここで、聞くことと読むことの機能的英語力には、メディエーション (mediation) の技能もあることを確認したい。メディエーションとは、英語と日本語を仲介する技能である。生徒が、英語のスピーチを聞いてその要点を日本語で述べたり、日本語で書いたスピーチ原稿を英語にしたりするスキルである。これらは、これまで英文和訳力・和文英訳力と言われ、「英語教育は聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの4技能、それに英文和訳力・和文英訳力を加えた5技能を育成する」などと言及されてきた。

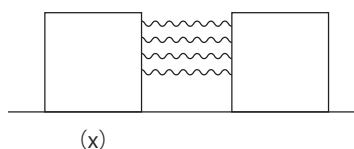
2つの言葉を仲介する行為は、自国にいる外国人観光客に対応する際や、科学論文を正確に訳して理解するときなど、日常の外国語使用で普通に見られることから、欧州評議会のCEFR (ヨーロッパ言語共通参照枠) はこれをメディエーションと呼んで、学習者のニーズに応じて指導するとした。こうした力は日本の高校入試でも測られるから、中学生が取り組むインプット活動には、機能的英語力としてのメディエーション力を育む役割もあると言える。

4. インプットと英語力の定着

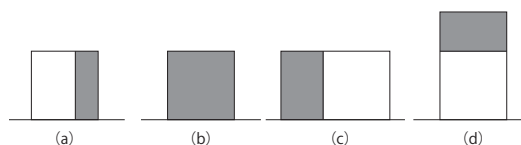
中学校の英語教科書には、「本文」に読むことのインプット活動に資する教材があり、リスニング課題に聞くことのインプット活動に資する音声がある。外国語の習得に対する適性が高い学習者であれば、こうした読むこと・聞くことの教材に触れて課題解決を行う「1度のインプット活動」で、言語材料や言語技能を習得し、構造的学力と機能的学力を伸長す

ることができる。

しかしながら、現行の英語週3時間体制では、授業と授業の間が空き過ぎ、多くの生徒は一度身につけた知識・技能を忘れがちである。また、現在の中学生は、他教科の勉強はもとより部活やテレビやゲームなど、せっかく定着させた英語の知識・技能に干渉し、やせ細らせてしまう刺激に囲まれて生活している。今、仮に、インプット活動で育む学力を「川の堤防」に、ようやく育まれた学力を剥ぐ要因を「川に流れる水」に例えると、現状は以下のように図示される。



いま左側の(土砂でできている)堤防(x)を工事して、川の水に流されないように強くする方法を考えると、以下の4つの方法があることに気づく。

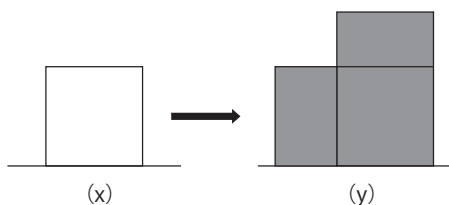


(a)は、堤防の一部が既に川の水で流されているときで、これには土砂を補充して治す必要がある。(b)は、堤防が柔らかいときで、これには土砂を加え、重機を反復させて固くする。(c)は、土砂を堤防の横に補強して、堤防の幅を広げて強くする方法である。最後の(d)は、土砂を堤防の上に積んで、堤防を高くして洪水に備えるものである。

インプット活動で育まれた生徒の壊れそうな学力も、同様の手だてを施すことで、忘却や干渉などの学習阻害要因から守ることができる。教科書を用いるインプット活動で、既習事項としていた語彙・文法が実際には生徒に定着していなかった場合、教員は、前の学習に戻ってそれらを補う必要がある。これは(a)と同じ行為であり、補充学習と言われる。また、生徒によっては「1度のインプット活動」では語彙・文法や技能の定着が不確かなので、英語を暗記するまで同じインプット活動を繰り返し、学力を

定着させる必要がある。これは(b)と同じ行為であり、反復学習である。生徒の学力の補強は、さらに、教科書のインプット活動と似ているが同一ではない平行課題(parallel task)に取り組むことでもなされる。これは(c)のように広げる活動であり、補強学習である。最後に、生徒は、インプット仮説に立って少し上のレベルの発展課題(extension task)に取り組むことで、知識と技能を定着させ、今よりも高いレベルにすることができる。これは(d)の高める活動で、発展学習である。

下図は、左側の堤防(x)が当初のものであり、矢印の先の堤防(y)が、(a)～(d)の工事全てを施したあとの最強の堤防の姿である。



生徒の学力についても、同様に、クラス全体で取り組むコア活動として、教科書の聞くこと・読むことのインプット活動を行ったあとに、個々の生徒の定着の程度に応じて、補充学習、反復学習、補強学習、発展学習としてのインプット活動を追加して行うことで、英語力をより確実に育むことができる。

5. インプットと英語力の到達レベル

先の(a)～(c)では、工事のあとの堤防の高さが変わっていない。インプット活動によって育む英語力についても、同様に、目標とする学力の最終到達レベルを変えないのであれば、生徒は補充学習、反復学習、補強学習に取り組むことでよい。これは、少ないインプットを確実にものにする指導法と言える。一方、(d)の堤防は、工事後に高くなっている。インプット活動によって育む英語力についても、同様に、教科書で共通に取り組むインプット活動のあとに、さらに発展学習としてのインプット活動に取り組むことで、生徒の英語力の最終到達レベルを引き上げることができる。これは、高いレベルのインプットを加えてより高いレベルの学力を育む指導法である。

グローバル化が進行し、人、物、情報が国境を超えて頻繁に行き交う時代を迎えている。こうした国際協力や国際競争の時代に生きるこれからの生徒に対しては、その英語力の最終到達レベルを引き上げる必要があり、学校教育はそのために必要な措置を行うという教育政策が決定された。

このことを語彙の習得を例にして検証する。2006年の中央教育審議会教育課程部会「審議経過報告」は、「今後は、発信力が重視されるので、基本的な語、連語及び慣用表現の意味と使い方が分かることなどといった基礎的・基本的な知識を定着させることが必要である」と述べ、語彙の定着が重要であると指摘した。2008年の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」は、「コミュニケーションにおける使用頻度の高い慣用表現や指導すべき語数を充実する方向で見直す」として、生徒が習得する語彙を増やす必要性を述べた。

この結果、2012年度から中学校で、2013年度から高校で実施される新学習指導要領に基づく英語教育では、中学で習得する語彙数が現行の900語から1,200語に増え、高校で習得する語彙数が現行の1,300語から1,800語に増える。中高6年間で習得する語彙数は、現行の2,200語から3,000語に増える。これに対応するためにも、中学校英語の授業時間を週3時間から4時間に増やし、英語を中学校で最大の授業時間を持つ教科にした。

新学習指導要領は、このように語彙学習の最終到達レベルを上げ、授業時間を増やすという対応を取ることで、補充学習、反復学習、補強学習、発展学習への取り組みを担保し、英語の語彙の習得を充実させる方向に踏み出した。中学と高校の新しい英語教科書を用いる指導では、当然、聞くことと話すことのインプット活動において、習得する語彙の量が増えたり、語彙に何度も接する機会が増えたりすることになる。こうして多くの生徒が、現状よりも高いレベルの語彙知識を、より確実に習得することが期待されることになった。

実は、この度の学習指導要領でのインプットを増やす対応でも、近隣諸国の英語教育と比べると、我が国の生徒が接するインプットは見劣りがする。以

下は日本と中国・韓国・台湾の教科書を比較・分析した投野由紀夫氏の指摘の一部である(2008年5月16日の教育再生懇談会会議でのプレゼンテーションの資料より)。

1. 日本の英語教科書は中学3年間の内容でほぼ1000語を教えており、アジア諸国(中・韓・台)の小学校終了時のレベルに相当する。
2. さらにアジア諸国の中学英語は、日本の語彙量の2~3倍、接触するテキスト量は3~5倍に上る。
3. 日本は高校教科書で背伸びをしており、語彙量を増加している割には少ないテキスト量でそれを達成しようとしており、無理がある作りになっている。

ここに見られる語彙のインプットについての質的・量的な不足の指摘は、インプットが育む他の英語力(文法などの言語材料や聞く・話す言語技能など)についても同様に当てはまると推測される。

6. おわりに

これまで、インプットが、生徒の言語材料、聞くこと・話すこと・メディエーションの言語技能、それに国際社会に生きる日本人の自覚などの関心・意欲・態度を育むことを見た。また、現行の学習指導要領に基づく英語教科書のインプット教材は、週3時間体制のもとで、少ないインプットで低めの学力レベルに確実に到達するように編纂されていることも確認した。

現在の中学校教育での英語は、授業がわかる生徒とわからない生徒がはっきりと分かれる「ふたこぶラクダ」の度合いが最も高い教科になっている。新しい教科書での授業が始まる前の移行措置期間である現在、インプット活動を充実させることで、授業がわかる生徒を増やし、クラスの集団の学力が右端に集まる「ひとこぶラクダ」にしたい。

そのためには、家庭学習や選択の時間なども有効に活用し、教科書と同じ活動に何度も取り組む反復学習をしたり、教科書と同様の平行課題に取り組む補強学習をしたりして、生徒が接するインプットを豊富にする取り組みが有効だと考える。